

## 海外活動報告書

一般財団法人いのうえ生命の財団 理事長 殿

氏名	小野塚 麗奈
活動先国名	アメリカ合衆国
活動先 (機関名・所属、学会名など)	Yale University, School of Nursing
活動期間 (西暦)	2026年 2月 25日 ~ 2026年 3月 3日
支援金給付期間	2026年 2月 25日 ~ 2026年 3月 3日
活動テーマ	Planetary Health, Well-being, and The Arts
活動の実施状況及び成果	
<b>【活動の実施状況】</b> 今回の派遣では、Yale School of Nursing Office of Planetary Health and Global Engagement が主催する国際交流プログラムに参加した。本プログラムは主に以下の3つの内容で構成されていた。 ① 講義やワークショップへの参加 大学院で実施されている Global Health に関する講義に参加したほか、Yale School of Nursing 初の Artist-in-Residence である Prescott 教授による講義およびワークショップが行われた。 ② 教員と学生との交流 修士課程の学生からアメリカの医療保健システムについての説明を受け、日本の医療制度との違いについてディスカッションを行った。異なる国の制度と比較をすることで、日本の医療システムの特徴や利点、課題について改めて考える機会となった。 ③ Yale University の施設見学 キャンパス、図書館、博物館、アートギャラリー、保健センターなどの施設を見学した。大学が芸術や人文学を重視し、学問分野を越えた教育や研究連携を推進している姿勢を実感することができた。	
<b>【活動の成果】</b> <u>Planetary Health と看護への理解</u> Prescott 教授の講義を通して、初めて Planetary Health の概念について体系的に学ぶ機会を得た。これまで Planetary Health とは、主に環境と人間の健康との関係を扱う分野であると理解していた。しかし講義では、生態系への着目だけでなく、人間の心理的・精神的な側面にも着目する必要があることが強調されていた。世界で起きている紛争、差別、ホームレス問題などの社会的課題は、地球規模での危機であると同時に、人間同士の関係性における危機であるとも捉えられている。このような視点から、Planetary Health においては、身体的・物理的な環境への対応だけでなく、人々の感情的知性、思考様式、思いやりといった内面的な変容も重要であるとされている。 これまで「地球環境レベルから人の健康を考える」という視点は、どこか遠い問題のように感じられていた。しかし、Planetary Health の観点から人々の健康やウェルビーイングを考えることは、医療やケアを提供する一人ひとりが、個人・社会・生きている地球との深い相互関係を理解し、すべての生命のウェルビーイングを支える価値観、思考、行動を育むことを意味するという理解に至った。	

### 自分の研究への示唆

私の大学院での研究テーマは、看護師が哲学対話を通して自己の認識枠組みや価値体系について振り返り考える経験が、臨床現場での実践にどのような影響を与えるのかを明らかにすることである。

今回の派遣を通して特に印象的であったのは、文化的な多様性を前提として看護教育を実施している点である。Yale University では無保険の住民を対象としたクリニックを大学が運営しており、学生がボランティアとして運営に関わっていることが紹介された。学生が教育段階から多様な背景をもつ患者や住民と関わる経験を積むことで、異なる文化的・社会的背景をもつ対象を理解しようとする姿勢が育まれるだけでなく、それぞれの状況に応じて自己の知識や振る舞いを適応させていくスキルが求められると感じた。このような経験は、自己の認識枠組みや価値体系を問い直す契機となる可能性があると考えられる。

これらの経験を通して、日本の看護教育との違いを実感するとともに、看護師が自己の価値観や認識枠組みを省察する機会をどのように教育の中に位置づけることができるのかという点について、新たな示唆を得ることができた。今後は、自身の研究の知見を踏まえながら、既存の看護教育や現任教育にどのように応用できるのかについて検討していきたい。

### 今後の活動予定

今回の派遣の成果について、学内での報告会を実施する予定である。所属大学と Yale School of Nursing との連携体制の維持と強化のためにも、本プログラムは今後も継続し、学生の学習目標に合わせて内容をより改善していくことが望まれる。また、私たちが米国の大学へ訪問するだけでなく、所属大学で開催される国際交流プログラムや国際学会にも参加してもらうことで、日本の看護教育や看護研究への理解を深めてもらい、若手研究者の間で早期から友好的な関係構築が進むことが期待される。

### 海外で活動した感想（現地生活で感じたことや海外留学のメリット等）

今回の派遣を通して、自分の研究テーマを英語で伝えることの難しさと同時に、その楽しさを実感した。人々のウェルビーイングの向上を目指す看護研究は世界共通の目標であり、自分と同じ志を持つ研究者や学生が世界に存在することを実感した。こうした仲間と出会うためにも、視野や活動の範囲を広く持つことの重要性を再認識した。また今回の経験は、将来どのような場所で、どのような形で研究を続けていきたいのか、自身のキャリアについて考える貴重な機会となった。



指導教授（所属長）署名

山本 則子

署名欄

小野塚 麗奈

日付 2026年3月16日

※活動中の写真を2枚添付してください。いただいた報告書を後日冊子にいたします。